

国宝「合掌土偶」の出土遺跡について

平成元年(1989)に出土し、平成21年(2009)に国宝となった「合掌土偶」は、風張1遺跡の第15号竪穴住居跡から出土しました。風張1遺跡の発掘調査地点は現在、養護老人ホームとなっており、**私有地であるため、立ち入りできません。**

老人ホーム付近の歩道には、風張1遺跡の解説板を設置していますが、駐車場はありませんので、徒歩で移動しての見学となります。

※老人ホームには駐車できません。



合掌土偶の出土状況(矢印)



現在のようす



風張1遺跡解説板の場所(矢印) 地理院地図から作成

※是川縄文館から徒歩15分(1.1km 上り坂)



遺跡解説板とその内容

風張(1)遺跡

風張(1)遺跡は、新井田川右岸の丘陵上に立地し、総面積は約75,000平方メートルに及びます。対岸には細文時代晩期の是川中居遺跡が所在します。昭和63年(1988)からの発掘調査により、縄文時代中期・後期、弥生時代、奈良～平安時代の遺構が発見され、約4,000年前から長い期間にわたって、この場所に人が住んでいた痕跡が見つかっています。

縄文時代後期後半(約3,500～3,000年前)の集落跡では、直径約150メートル内に堅穴住居跡・掘立柱建物跡や、墓、貯蔵穴などに使用されたとみられる土坑が多数検出され、これらは土坑墓群のある墓域を中心として環状を呈することがわかりました。約500年にわたるムラづくりの様子がわかる貴重な事例となっています。

縄文時代後期後半の遺物は、土器・石器のほか、ポーズをとる土偶、土製耳飾り、スタンプ状土製品、石製玉、トチやクリの実といった自然遺物など多種多様にわたっています。中でも堅穴住居跡から合掌土偶や炭化米が発見されたことにより、本遺跡は全国的にも知られるようになりました。遺物は当地域の縄文時代後期後半の文化の実態を示すものとして重要で、平成9年(1997)に664点(附炭化米2点)が国の重要文化財に指定され、そのうち、合掌土偶は平成21年(2009)に国宝に指定されています。

※これらの遺物は、是川縄文館で収蔵・展示されています

平成27年(2015)12月

八戸市教育委員会